

復讐言はなぜ許されないのか
特集・犯罪被害者の声を聞け 東野圭吾／藤井誠二／櫻井よしこ／呉智英 ほか



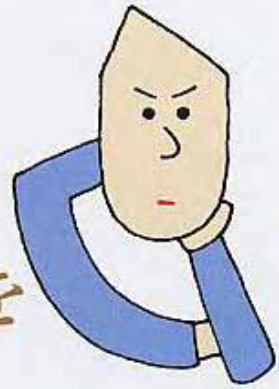
特集 反日に走る韓国社会
斐 淵弘／池東旭／小針 進

特集 | メディア買収
堀江貴文の
迷走する幻想
山本一郎 ほか

中台緊張は
日米同盟で対応を
R・アーミテージ

独占インタビュー

海老沢勝二 NHK 前会長
NHK・朝日問題の真相をすべて明らかにする



先端科学技術で中国に肩を並べられた日本
科学審査制度の改善こそ国家の急務だ
高部英明 222

ルポ・アルツハイマー介護家族の現実
肉親を憎む時、愛おしく思う時
河合香織 233

シリーズ・「五感」の秘密に迫る②
味覚「混乱する食とおいしいさ」の謎
山下柚実 246

シリーズ・
手業の記憶 ④
持ち運びできる箆笥を編み続けて
村上健司 306

「歌」の精神史 短歌の叙情、演歌の感傷
新聞の論点 社説を読み比べる
山折哲雄 286
長山靖生 242

グラビア
異人たちの通産—近代建築探訪⑤
文・藤森明彦 写真・増田彰久 (解説193)
Stage 文・大坂古雄
Film 文・岡田秀則
Art 文・住友友彦
石にひそむ記憶⑤
中国・万里の長城
撮影・文・辻丸純一
インドの神秘 ミティラー絵
撮影・文・井上和博
ハワイのノースショアへ
撮影・文・野寺治孝
弘兼憲史のエネルギーを考える⑧

コラム
人物交差点 114
松本健一／中村利雄
雅眼 柳原和子 298
鎌倉傘張り日記 長毛孟司 266
自由時間 池内 紀 270
ブック・レビュー
千葉 望／東谷 晴／
鈴木章生／白鳥恒太郎 274
古典再読 廣瀬千紗子 279
遺書、評読 長瀬安浩 263
ベストセラー診察室 岡崎武志 280
今月の集中講義
「子育てと父親」 杉山 春 282
説苑 318
探訪 日本の川 大井川 32
21世紀世代「この先を見る」
相楽和紀 146
最前線ウォッチング 285

表紙デザイン：菊地信義
表紙イラスト：江口修平
目次デザイン：高木重和 (FACE)
装画・カット：池内 紀・時川真一・
古川タク
●本誌掲載の商品価格には消費税が含まれています。

先端科学技術で中国に肩を並べられた日本 科学審査制度の改善こそ 国家の急務だ

審査制度の質が国の科学レベルを左右することを、もっと認識してほしい。それは、軍隊を持たない日本において安全保障維持にかかわる問題なのだから

高部英明 / 大阪大学レーザーエネルギー学研究所センター教授

冷戦が終結した二十一世紀においては、すべての分野でグローバル化が進行しており、その最たる分野が科学技術である。科学技術の国家間の競争が激化してきた今日において、世界の良き協力者として日本が生き残るには、世界における競争力を持ち続けることだ。協力と競争は相反するのではなく、良き協力者であるには良き競争相手であり続けることが条件になる。

科学技術は世界の中で我が国の存在価値をも左右し、国も科学技術推進のため「科学技術基本法」の制定(九五年)、その法に基づく予算の増大など積極的に支援している。また、予算の有効活用のため、「競争的資金」という自由な申請とその厳密な審査による優れた科学技術への投資を増やしてきている。それはすばらしいことであるが、その審査制度が国際的なレベル

に比べ遅れているのだ。

「科学審査の質がその国の科学の高さを測る物差しである」という哲学を米国は持っている。審査制度の抜本的見直しなくして、日本の科学技術立国、国家安全保障も維持できない。

私の専門はプラズマ物理に関する理論・シミュレーションである。この研究分野は米国や欧州が中心であるが、最近では中国の発展がめざましい。私の

て高等教育を受けていない。

そして、〇二年十二月、北京の物理研究所副所長の張杰と出会った。彼は文革後の世代であり、四十四歳で副所長。その後すぐ、最年少のアカデミー会員に選出された。中国で八八年に学位を取得した後、ドイツ、英国に一〇年間滞在した。彼が主催した日中ワークショップに参加し、中国から興味深い研究報告が数件あり、正直驚いた。行く前には学術的内容に期待などしておらず、「おつきあい」での参加と割り切っていたからだ。

そして、昨年十二月、海南島で行われたセミナーに出席して圧倒された。帰国してすぐ、私が在職するセンターの構成員全員に「理論・シミュレーションの研究水準で、中国に並べられたい。中国には米欧日などで学位を取った若手の研究者が日本の五倍はいます。次は追い越されるだけです」とメールを送った。これは正直な気持ちである。セミナーの際、後述する米国NSFの

専門分野から見た中国の躍進と、その躍進の背景にある米国の方式を取り入れた基礎科学の審査・推進制度についてまず説明する。また、科学技術政策や審査では世界で最も優れている米国のNSF(全米科学基金 <http://www.nsf.gov>)について、審査パネルに昨年出席した際の経験も含め紹介したい。そして、最後に、科学技術立国を標榜する我が国の科学審査制度に対する問題点を指摘し、解決のための具体的提案を述べようと思う。

七年の間に事態は急変

中国を最初に訪ねたのは一九九七年八月、北京のIAPCM(応用物理計算数学研究所)で一週間の講義を依頼された時であった。その際、研究所の



たかへひであき一九五三年生まれ。大阪大学工学部、同大学院工学研究科博士課程修了。西独マックス・プランク研究所研究員、アリソンナ大学助手を経て現職。日本物理学会理事。プラズマ物理学、宇宙物理学、計算科学を専攻。二〇〇三年にE・テラー賞受賞。著書「さまざまなプラズマ」など。



中国の大学・研究機関が集まる中関村科技園区(北京市海淀区)

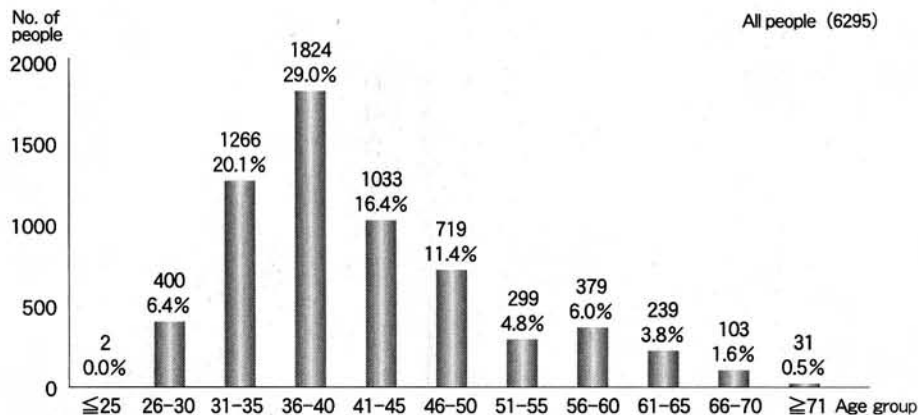


図1 中国自然科学基金の競争的資金「一般プログラム」に採択された研究者の年齢分布 (NSFCの2003年度年報より)。若手研究者に予算が集中している

科学官制度や審査パネルのすさまじさ (筆者は〇四年十二月八日付『朝日新聞』「直言」でも指摘) を張杰に話したところ、「中国も負けていない。米国より優れた審査制度で科学技術の驚異的な伸展を実現している。中国の制度があまりにうまく機能しているの、ドイツから視察団がきた」と言われた。張杰は昨年、四十六歳の若さで全中国に広がる八九の基礎科学研究所の総責任者に任命され、一年間に、すべての研究所のヒアリングをするそうだ。今年の前半は、中国科学院総裁と先進国を中心に公式訪問するため忙しくしている。中国の若返りの大きな理由は文化大革命時代の空白であるが、同時に、この空白を中国は積極的に科学の世界を若手中心で推進する構造に変革することに利用した。その背景には、中国共産党のトップ・ナインが胡錦濤主席をはじめ、全員理工系出身であり、科学の推進に若手の活力や独創性がい

かに大切な、理解していることもある。友人曰く「文化大革命は大変痛ましい歴史的愚行であったが、それがあつたために、幸運にもこの国では世代交代が大がかりに行うことができ、それが、今日の急速な科学発展に繋がっている。歴史とは皮肉なものだ」と。中国の躍進は日本の明治維新に似ている。明治維新では伊藤博文など三十代の世代が必死に近代化に邁進し、富国強兵の我が国を築いた。現代中国は共産党独裁政権であることがうまく機能し、共産党の意向で、日本では到底不可能と思われる劇的な世代交代を学術界で行うことができた。しかし、世代交代だけでは科学の躍進は望めない。その前に、中国には日本より優れた科学推進の機能が備わっていた。それが、世代交代や、先進国で学位を取った一五万人の研究者の帰国政策の相乗効果もあり、今日の躍進の原動力になっている。

今年の二月に共同研究の打ち合わせで北京に行った際、中国自然科学基金 (NSFC) を訪ねた。NSFCは八六年に楊振寧 (ヤンゼン) (一九五七年、ノーベル物理学賞受賞) の献策で設立されたものだ。楊は中国の科学発展には米国NSFと同じシステムが必要であると、鄧小平に説き、調査団を米国NSFに派遣し、NSFの「いいとこ取り」をした。現在では一七二人の専任の科学官 (うち一八人が教授、助教の肩書きを持つ) が米国NSFの科学官たちと同じように忙しくしている。彼らは申請一件につき五人に書面審査を依頼し、結果を検討、修正もし、一週間に及ぶ専門家によるパネルを主催し、採択審査・決定を行う。科学官が審査に責任を持つことで、真に価値ある申請に予算をつけることができる。中国NSFCへの年間申請件数は約三万。全体予算の半分は一般プログラムに分類され、その採択申請代表者の

年齢分布が図1である。一目瞭然三十代が断然多い。次に予算が大きいのが自由申請で、前者と合わせると全予算の九割に達し、前者同様三十一〜四十五歳の責任者が多く、六四%を占める。現在、申請数が増えており、一七二人の専任科学官では対応できなくなっている。米国NSFのように二年間だけ専属で務めてもらう科学官の制度 (Rotator Program) を導入しつつある。二年間NSFCに勤務し、二年後に同じ職場に復帰する条件で全国の研究所、大学との合意が得られたとのこと。また、NSFCは欠員の科学官を公募している。最近希望者が多く、公募での競争率は一〇倍だそうだ。

軍事関連から民間レベルへ

米国物理学会 (APS) <http://www.aps.org> は会員数四万三

〇〇〇人で外国の会員も多い。私も会員である。この学会では政治活動まで行っており、同時に公開性が高い。毎年、物理関連研究開発予算が会員の月刊誌『Physics Today』に詳しく報告される。図2に〇四年度の予算分布を示す。DOD (国防総省) が五二%と突出し、NASA (航空宇宙局)、DOE (エネルギー省) なども大きい。核兵器関連の研究はDODでなくDOEが担当しており、DOE予算の五〇%が同省内のNNNSA (国家核安全保障局) に配分されている。DOEの前身はマンハッタン・プロジェクトであり、これが戦後、原子力委員会と名を改め、その後、エネルギー省になった。だから、核兵器関連研究はDOEの管轄下にある。NASAのスペースシャトルなども当初、軍事目的の打ち上げが半分ほどもあり、このようなことから米国の物理関連研究開発費の六〇七割程度は軍事がらみと判断できる。軍事ではコストを度外視した挑戦的

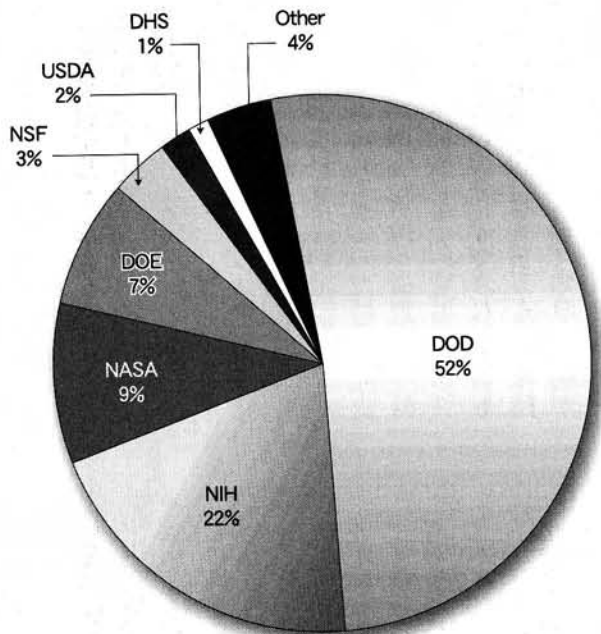


図2 物理関連研究開発予算の米国内訳 (米国物理学会月刊誌「Physics Today」より)。国防総省 (DOD)、国立衛生研究所 (NIH)、米航空宇宙局 (NASA)、エネルギー省 (DOE)、全米科学基金 (NSF)。米国の物理研究予算の60~70%は国防関連研究である

人がこの四項目を独立に入力する。実際のパネル審査の際には教育的意義も重要な評価基準になる。NSFはプロジェクトを通して若い人材を育てることができると注視している。審査ではしっかりした教育プログラムを持っているのかも議論の重要な点になる。審査員一二人がNSFの第二ビル

(会議専用ビル)に集まり、三日間、議論をする。議事進行をするのは三人の科学官だ。彼らは議論に耳を傾けるが口は挟まない。侃々諤々の議論をする。事前審査の結果と最終評価は必ずぶら変わる。このような議論をすれば、当然、審査員の能力も裸になってしまふが、皆はそれを覚悟でこのパネルに

参加している。ジャメソンは、議論が収束した頃を見計らって、白板に書かれた三つの分類 (Excellent, Good, Lower rank) のどこに位置づけるかPI (申請代表者 Principal Investigator) の名前を貼り付ける。三日間で Excellent, Good, 二〇件ずつ分類し、順位もつけた。しかし、これはあくまで民主的議論による順番である。科学が民主主義だけで発展するかというところではない。アインシュタインの例を出すまでもなく、必ずしも学術界に受け入れられないが、後世高く評価されるであろう研究にも、いかに予算をつけるかがNSFの関心事である。そのために科学官がいる。彼らは普通、二年契約でNSFに勤める研究者であり、自分なりの専門分野に対する将来展望を持っている。パネルでついた順位を尊重しながらも、科学官は自分の価値判断でどれを採用するか決める (審査過程の補足説明は28ページ参照)。

な最先端科学技術に予算を投入する。それが、何十年後には民生技術として世界のマーケットを席巻する。

さて、NSFだが、予算は全体の3%と相対的に少ないものの、基礎科学の力を高めるために設立された独立組織である。その設立の契機となったのは、五七年の「スプートニク・ショック」だ。予算は少ないように見えるが年間予算四一億ドル (〇四年度) は、日本の大学の競争的資金の大半をまかなう日本学術振興会 (<http://www.jps.go.jp>) の一八三〇億円 (〇四年度) の二倍強である (参考までに、NSFの〇四年度予算は二〇億元。日本円で三〇〇億円。ただし、中国の物価は日本の五分の一程度であり、実質的には同じくらいの価値がある)。日本学術振興会 (通称「学振」) は世界中の基金と協定を結んでいて、米国の相手は主にNSFである。

NSFは競争的資金を公募し、申請内容を審査し、資金を配分し、かつ、

予算を執行しているグループやプロジェクトが資金を有効に使いながら目的を達成するための助言などをする。同時に、どのような分野に予算を配分するかなどについて科学官 (Science Officer) の訳、職名は Program Director: PD) 同士が議論しながら決めていくという、独自の科学政策の策定を行っている。NSFの精神は「科学審査制度の質が国の科学レベルを決定する」という哲学にあるのだ。

三日間の白熱した議論の末に

筆者は、昨年十一月三日から五日の三日間、このNSFの学術審査パネルに、友人で科学官であるリー・ジャメソンの推薦を受け審査員の一人として参加した。数理科学分野の審査で、二人の審査員が討議し、一件が三年間で約一億円のプロジェクトに、全米から応募してきた四五件の申請に順位を付けるためのパネルである。最終的に四件を採択する。

今回の四五件に関しては一件につき三人が事前審査を担当。二カ月ほど前ジャメソンから四五件のリストが送られてきて、①自信を持って審査できる、②審査できるだろう、③何とか審査できるだろう、を五件ずつ選べと来た。その後、一〇件の事前審査を依頼するメールが来たので見てみると、驚いたことに申請書というより学術論文である。申請書の四〇ページ弱に小さい字でびっしりと、今回の申請内容とその学術的位置づけがレビュー論文の形式で書かれていて、二〇〇編ほどの参考文献が引用されている。

私の一〇件については、事前に、①この申請の学術的価値は何か、②この申請は広い分野にインパクトを与えるか、③審査結果の概要、④その結果のランクはE (Excellent) V G (Very Good) G (Good) F (Fair) P (Poor) のどれかを、NSFのパネリストだけがアクセスできるURLに入力しなければならない。一件につき三

心臓外科医の挑戦状

南淵明宏

天才といわれた心臓外科医が
腐敗した現代の医療を豪快に斬る！

心臓外科医の
挑戦状



著者初の書き下ろしエッセイ
1575円(税別)

中央公論新社
http://www.chuko.co.jp/

彼ら科学官は、五年後には採択した研究の成果を含め、採択能力に対する評価を受ける。したがって、自分が予算化したプロジェクトのアフターケアもする。定期的にプロジェクトの研究者を訪ね、進捗状況を聞いたり、問題にぶつかっているなら相談にも乗る。

三日間の審査でかかった経費は旅費など含め約四〇〇万円。採択額の１％である。１％のお金で、すばらしいプロジェクトの予算化ができれば安いものである。また、審査員もここが米国人、日本が一人と米国が五人。私と東京から来た日系米国人以外は米国の大学などに勤めている。また、NSFの競争的資金では外国から研究者を雇うことができ、最近では中国人やロシア人が採用される傾向にある。

審議の過程で日系米国人から「こんなに外国人に予算が流れたら、米国人の科学者が育たないのではないか」と

いう疑問が出た。これに対し、ジャメソンは「NSFには米国籍の人は申請できない公募もあるが、基本的には国籍を問わない。世界で一番優れた研究が米国で推進されることが何よりも大切と、NSFは考えている」と答えていた。

情報の乏しさと制度の問題

我が国の審査制度と決定的に違うのが専任の科学官の制度である。〇五年三月時点で米国NSFでは七七〇人の科学者が専任で働いている。NSFは審査制度の改善に常に関心を持っており、パネリストたちからの科学官や制

審査過程の補足説明

初日の八時半に集合した。三人の事前審査員が自分の審査結果の紹介をする。議論が始まると機関統のように英語が飛び交う。当然、申請内容を事前審査員よりよく知っている審査員がいて、評価に噛みつく。意外であるのは事前審査員が自分の審査結果に拘泥しないことだ。このパネルでは、知らないことは「知らない」と言う勇氣、それを許す暗黙の了解がある。実りある審査にはこのような雰囲気が一番大切だ。一件当たり平均二〇分の議論を行う。さらに、ExcellentやGoodの中の順位も議論しながら決めていく。

最後の作業は申請者に開示する審査結果の文章についての議論である。Scribe（書記）と初日に指名されていたパネリストが原案を書く。書記が文章を入力すると目の前の画面にきれいに

に表示された文章を、全員が見ることが出来る。この文章に対する議論もさまざま。国語の時間かと思うくらいに、表現や、形容詞の使い方、複数か単数かなども議論をする。書記の文章に異議のある人は発言と同時に、タイプで入力し、「このような文章にするべきだ」と皆の画面に表示する。

パネルで民主的に順位がついた。その順位は尊重しながらも科学官は自分の予算からどれを採択するか決める。今回の場合、ジャメソンは二件、他の二人の科学官が計二件で合計四件が目安だ。科学官が採択を決めたものについては、部門の会議での承認が必要である。そこで、パネルの経緯と順位も報告しながら、例えば「なぜ、一番ではなく六番に予算をつけるか」の説明をし、承認してもらわなければならない。

度に対する細かな注文などにも耳を傾ける。また、科学官の重要な役割に科学政策の説明責任がある。国際会議やワークショップなどに出かけ、自分が担当する分野の科学政策について具体的にわかりやすく説明する。当然、質問などに丁寧に答え、その場で回答できない事項は「ワシントンに持ち帰って、検討する」との答弁がある。

我が国では九五年に「科学技術基本法」が成立し、科学技術予算は第一期（九六〇〇年）一七兆円、第二期（一〇〇五年）二四兆円と増え、現在、第三期（一〇六〇年）に向けた議論が委員会で行われている。予算の増加は我

が国の競争的資金のほぼ半分をまかなう日本学術振興会の年間予算の増大にも表れている。過去七年間で一・七倍に増えた。予算も増え、プログラムも増えるに従い、審査制度の問題点が浮き彫りになってきている。

そこで、学振は新制度を導入し、文理の学術全分野で一〇二人の研究者（主任研究員、専門研究員と呼んでいる）の組織を作っている。しかし、彼らは週に一〜二日程度、科学官に相当する仕事に従事する「兼務」の科学官である。また、我が国では審査のプロセスなどは公開されているが、審査結果についても「このような点を改良すれば魅

力的な研究になる」などの建設的な審査結果の通知に乏しい。数年前、ドイツの友人がESF（欧州科学基金）にプロジェクトの申請をした際の話をしてくれた。審査の後、科学官が「あなたの人材を集めるとさらに魅力的になる」など、丁寧なフォローがある。だから、何回か申請するうちにプロジェクトの内容も陣容も思いもしないほど魅力的になっていく。

とかく、日本では審査の現場の雰囲気やどのような議論がされたか、改良点はどこかなど、専門家による審査なら自信を持って申請者に伝えられるはずの情報に乏しい。何かと腫れ物に触るように、隠したがる傾向があるようだ。現在では審査後に審査員がホームページで公開されるようになり、少しは公開性が高まったことは事実だが、まだ専門家による精緻な審査で「科学技術立国日本の将来に投資している」と胸を張って主張できるような審査の

現状ではなさそうに私は思う。

文部科学省には以前から「科学官」の制度がある。ただし、研究所長や副所長、大学の教授が兼務しており、名は科学官だがNSFやNSFCの科学官とは役割が違う。自分の所属する機関での研究などの本務以外に科学官としての仕事に何割の時間を割いているかといえば、役割の定義にもよるが、たぶん、極めて少ない割合であろう。

また、「調査官」という助教クラススの大学教員を中心とした組織もある。しかし、彼らの任務がどのようなものか、彼ら自身も不確かであるのが現実のようだ。名前や組織はありそうに見えるが、科学政策や審査など科学技術立国を支える要の実態は中国の足下にも及ばない。

米国NSFの科学官のように、研究者が霞が関に常駐し、科学政策や審査に専従する必要性を総合科学技術会議は認めており、報告書に記載されている。しかし、それが実現していない。

動かし、法を定めた。

では、科学技術立国を維持・促進させるために何が必要か。まずは予算が増えた。良いことである。しかし、その予算を価値の高いものに投資していく審査制度や長期的な科学政策の立案過程が近代化されていない。すべての原因は「現場を知る科学のプロによる科学審査や科学政策立案が行える仕組みが導入されていない」ことによる。

そこで提案したい。大学の研究者などが霞が関に二〜三年常駐し、官僚と机を並べ、科学審査に携わり、同時に科学政策を立案していく。これは、後世、良い施策であったと評価される仕

事を官僚にしていたために科学者が協力しようというものである。科学者も大学では経験できない科学行政を、身をもって学ぶことができるし、そのような生き証人が増えることは、日本の科学行政をより高度で先進的なものにしてくれると確信する。科学官制度は官僚から予算権を奪うというものではない。今のうちにこのような制度を日本に導入しないと、中国の台頭、米国の一人勝ちの二十一世紀において、日本の立国精神、「科学技術立国」はまさに空洞化してしまう。

実は、別の角度からも科学技術立国の危機感を募らせている。一年半前に

「科学審査制度の質が、その国家の科学の高さを測る物差しである」という米国NSFの精神を、どこまで真剣に我が国は受け止めているのだろうか。

世界のリーダーへの条件

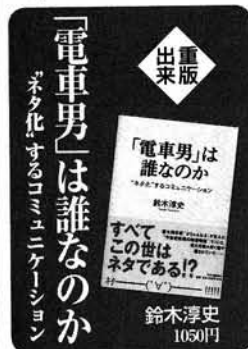
「我が国は、科学技術に関して、いわゆるキャッチアップの時代の終焉を迎えております。今後は、フロント・ランナーの一員として、自ら未開の科学技術分野に挑戦し、創造性を最大限に発揮し、未来を切り拓いていかなければならない時代にさしかかっています。(中略) ひるがえって我が国の科学技術の現状を見ると、まことに憂慮すべき状態にあります。特に、独創的・先端的科学技術の源泉となる基礎科学の水準は欧米に著しく立ち遅れており、基礎科学の担い手たるべき大学・大学院、国立試験研究機関等の研究環境は欧米に比べ劣悪な状況に置かれています」(九五年の科学技術基本法提案理由説明より)。この危機的な認識が国を



大増刷
今週、妻が浮気します
ネットから生まれた大人の愛の物語。



GoAhead&Co.
1050円



「電車男」は誰なのか
表示価格は税込定価
中央公論新社
http://www.chuko.co.jp/

本記事を通して提案したいことは次の二点である。

一、日本に専任科学官制度を導入し、科学官と官僚が一緒になって科学政策の立案・実施・評価を行っていくこと。科学官が主体的に科学審査のパネルなどを開催し、真に投資価値のある研究に予算をつけよう。科学官の霞が関での二〜三年がキャリア・アップにつながるように、科学官に最大限の裁量権を与えてほしい。

二、競争的資金の交付額の1%を、専門家による徹底した審査のための予算として使おう。その際、権威ある偉い先生に審査員になっていただくのではなく、研究の現場も知り、ある程度広い視野を持つ四十、五十代の研究者に、裸になるまで議論して貴重な税金の使い道の順番を決めていただく。

科学官となり大学や研究所を二〜三

年離れ、東京で勤務するには、当然送り出す大学などの理解が必要であるし、受け入れる文科省などの意識改革も必要である。同時に、我が国の科学研究者が「研究をするのが研究者であり、専任の科学官がする研究行政などは研究を放棄した研究者のすること」という、旧来の狭い考えを改め、「研究環境を世界的に競争力のあるものにする」とは研究者として極めて重要な役割である」という認識に改める必要がある。研究者自身の意識改革も要求される。

米国や中国の制度をそのままコピーしても機能しない。外国の良いところを取り入れ、我が国の風土に合った制度にしていく必要がある。しかし、その過程で「科学審査制度の質が我が国の科学のレベルを決定する」という基本理念は堅持すべきである。これなくして、米国への知の一極集中、中国の驚異的な躍進に、我が国が対等、もしくは後れをとらない科学技術立国を長

期に維持することはできない。努力しても引き離されるのなら、それは仕方がないことであるが、努力を怠ることの後れをとることは自殺行為に等しい。我が国は憲法第九条で「軍隊」を持たない国家になった。しかし、国家安全保障は何も軍隊を持つことを意味しない。科学技術でしか立国できない我が国の国家安全保障とは、科学技術を常に世界の最高レベルに維持することであり、科学技術で世界をリードすることである。その国家の安全保障が危ない、と科学審査の現状から警鐘を鳴らしたい。

私は、子供や孫から「なぜ、日本をこんな小さい国にしてしまったの。肩身が狭くて、世界を歩けたものではない」と何十年か先、責められたくはない。そんな思いでこの記事を書いた。ぜひ、世界に誇れる科学審査制度に改め、世界に日本という科学技術立国の存在をアピールし続けてほしい。私もそのための努力は惜しまぬ覚悟である。

◎

ルポ●アルツハイマー介護家族の現実

肉親を憎む時、愛おしく思う時

二〇二五年には三二三万人に達すると言われるアルツハイマー病。子育てとの両立、介護拒否、世間体、きれいな事では乗り越えられない厳しい介護は決して他人事ではない

河合香織／ライター

介護と子育てを両立させる負担

「あっちへ行け」

決意をしたのは、三歳の娘が、七十歳の祖母が孫を抱こうと近寄ってきたときに、突き飛ばしかねない勢いで手を払い、あどけない顔に似合わない言葉を吐いたのを聞いたときだった。

四年前から、川端美和さん（三十八歳）は壮絶な日々を送っていた。同居していた父親が脳梗塞で倒れ、入院し

た。同じ頃、母親がアルツハイマー型老年認知症になったのだ。それまでも父がたまに、「ママがボケちゃって大変だ」とこぼしていたが、二世帯住宅だったこと、娘が小さかったこともあり、あまり気にも留めていなかった。

しかし、父親が入院して、母親と向き合うことになり、通常ではない行動を目にするようになった。実印をなくしてしまふ。天井に蛇がいるという。同じ言葉を繰り返す。徘徊する。家に帰



アルツハイマーの母を介護する川端美和さん。介護と子育てを両立する日々

つてくると部屋中に便がなすりつけられている。

「子供のうんちと老人のでは全然違うんです。臭いが違う。そして、子供はおむつが取れていくけれど、老人は重くなっていくばかりでうんざりしました」

当時一歳だった娘は、児童館や保育園に預けて、父親の病院と、母親のアルツハイマーの介護に手一杯の毎日を送っていた。